札幌市高齢者の社会参加支援の在り方検討委員会

第５回会議　議事次第

日　時　　平成 28 年（2016 年）９月 21 日（水）
15 時 30 分～
場　所　　わくわくホリデーホール
第１会議室

1　開　　会

2　議　　事

(1) 調査結果（速報）

ア　事務局説明
・　調査結果（速報）　【資料１】

イ　意見交換
・　集計項目について

(2) 検討報告事項

ア　事務局説明
・　第４回会議振り返り　【資料２】
・　第１回～第４回会議の検討内容　【資料３】
・　検討報告書　構成（案）　【資料４】
・　検討報告書　骨子（案）　【資料５】

イ　意見交換
・　検討報告事項について

3　閉　　会

さっぽろカラフルさんかくプロジェクト
いつまでも社会参画できる街へ

配布資料

資料１　　社会参加に関する市民意識調査　調査結果（速報）

資料２　　総体としての再構築（第４回会議振り返り）

資料３　　第１回～第４回会議の検討内容

資料４　　検討報告書　構成（案）

資料５　　検討報告書　骨子（案）

資料１

社会参加に関する市民意識調査　調査結果（速報）

高齢者の社会参加支援の在り方検討の参考とするため、「社会参加に関する市民意識調査」を実施した。

１　調査の概要

(1) 対象者と対象者数

平成 28 年７月１日時点で本市に住民登録がある市民の中から、20 歳以上 64 歳以下 4,000 人、65 歳以上 4,000 人（計 8,000 人）を無作為抽出

(2) 調査方法

郵送法による無記名アンケート

(3) 調査基準日

平成 28 年８月１日（月）

(4) 調査期間（発送～投函期限）

平成 28 年７月 28 日（木）～平成 28 年８月 15 日（月）

(5) 回収状況

	発送数	回収数（率）	有効回答数（率）
64 歳以下	4,000	1,438 （36.0%）	1,413 （35.3%）
65 歳以上	4,000	2,204 （55.1%）	2,199 （55.0%）
全　　体	8,000	3,642 （45.5%）	3,612 （45.2%）

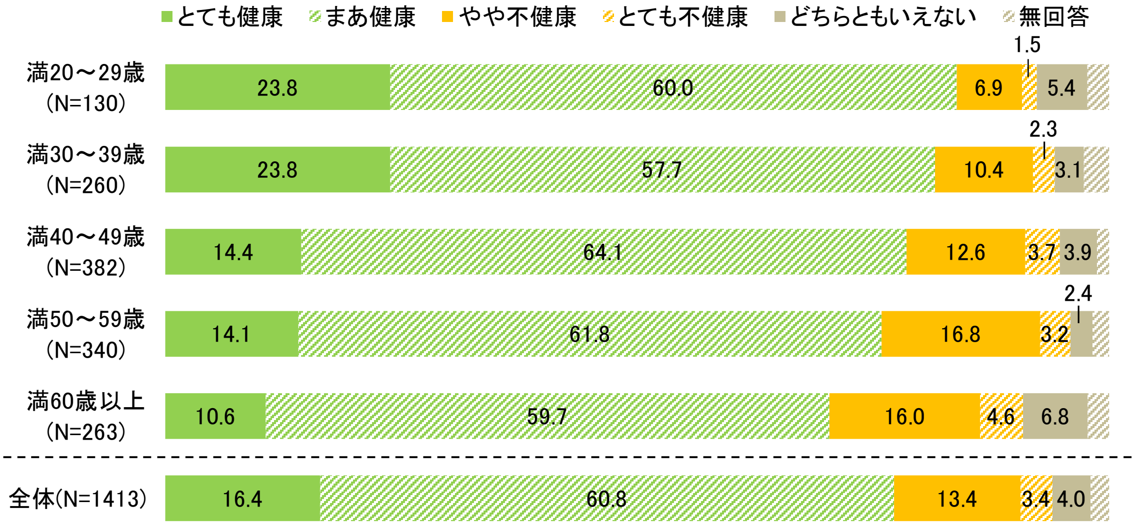
資料１

２　主な調査結果

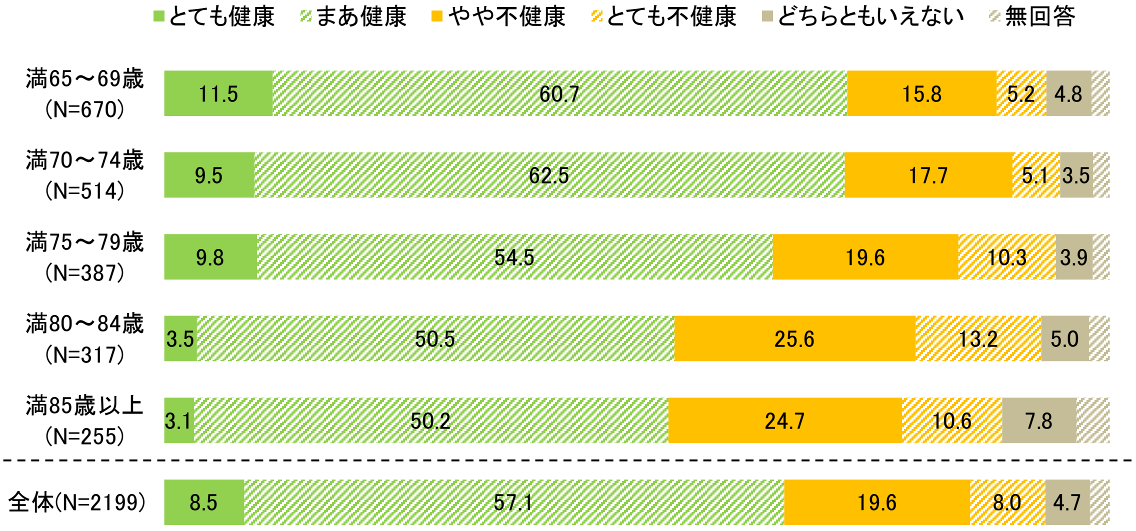
問２－１　健康状態

全ての年齢階層で、「とても健康」「まあ健康」を合わせた割合が、「やや不健康」「とても不健康」を合わせた割合を上回っている。また、年齢層が高くなるにつれ「とても健康」「まあ健康」を合わせた割合は低下するが、その割合が最も小さい「満 85 歳以上」の階層にあっても 53.3％となっている。

【64 歳以下調査】



【65 歳以上調査】

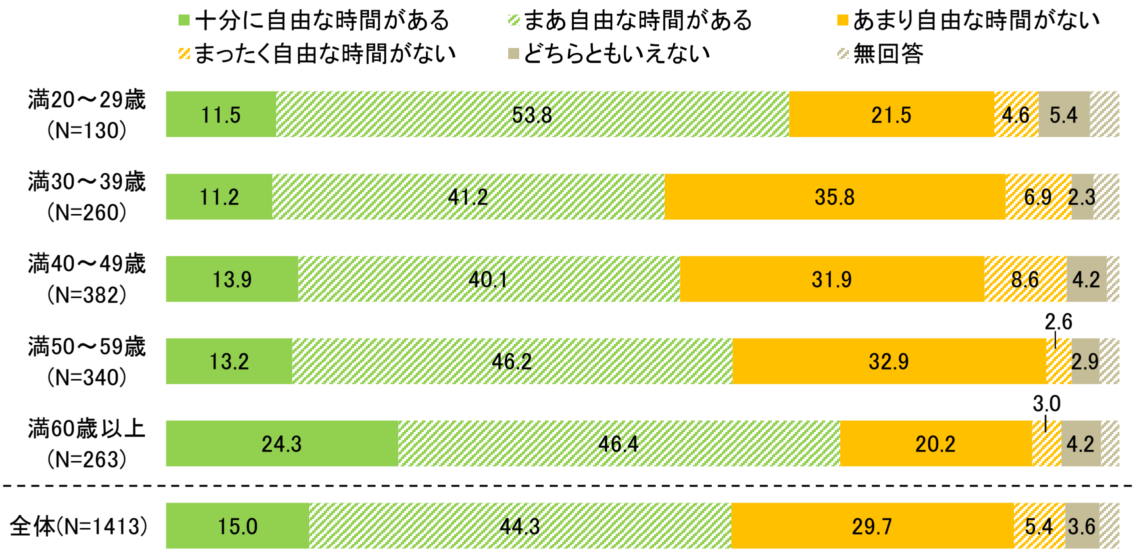


資料１

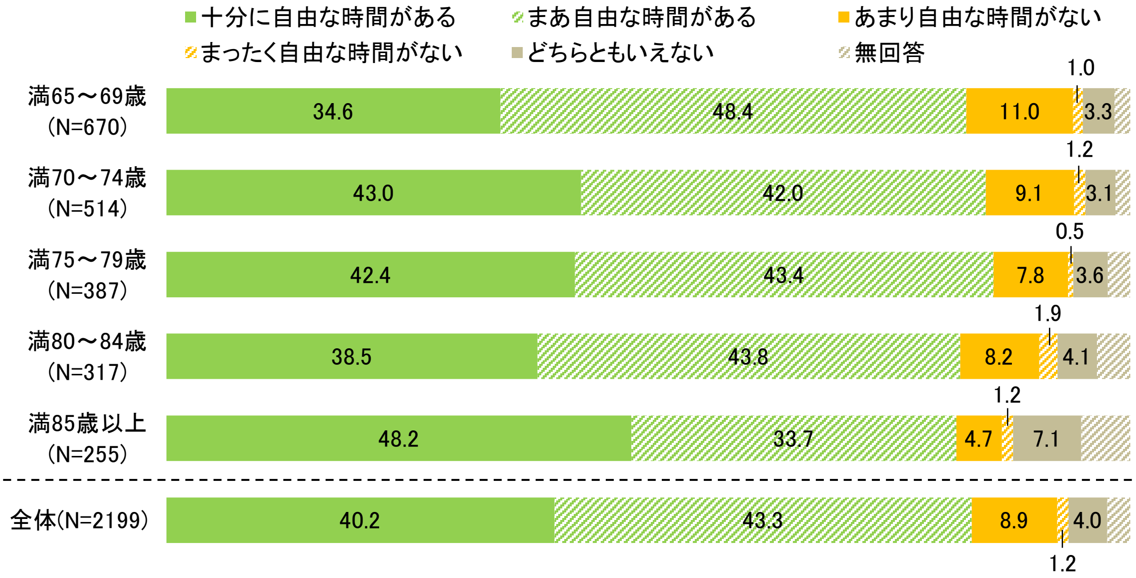
問２－７　自由な時間

30 歳代以降では、年齢層が高くなるにつれ「十分に自由な時間がある」「まあ自由な時間がある」を合わせた割合は増加する傾向にあり、その割合が最も大きい「満 75～79 歳」の階層では 85.8%となっている。

【64 歳以下調査】



【65 歳以上調査】

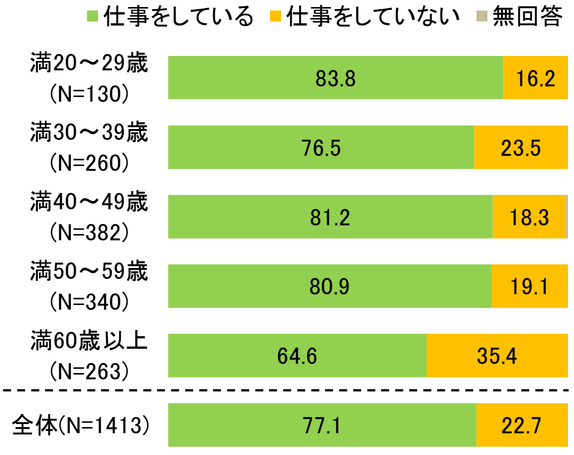


資料１

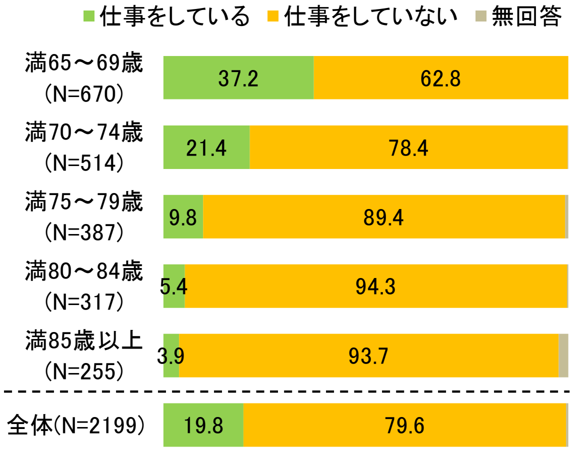
問３－１　就労有無

59 歳以下の年齢層では８割前後が「仕事をしている」と回答しているが、60 歳以上の年齢層では、年齢層が高くなるにつれ、その割合は小さくなっている。

【64 歳以下調査】

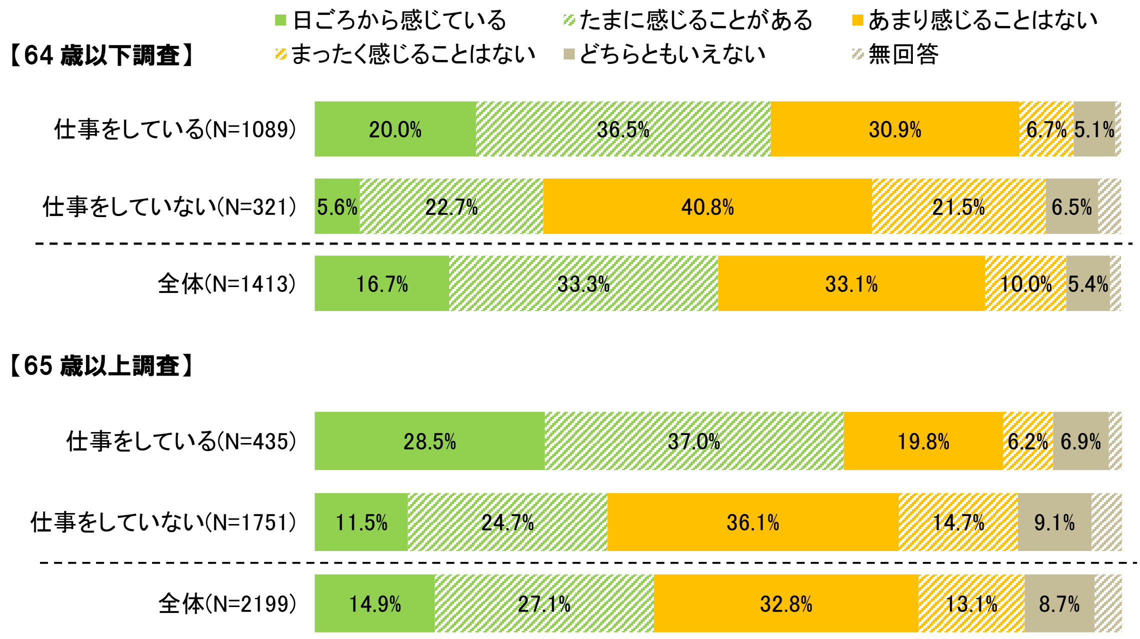


【65 歳以上調査】



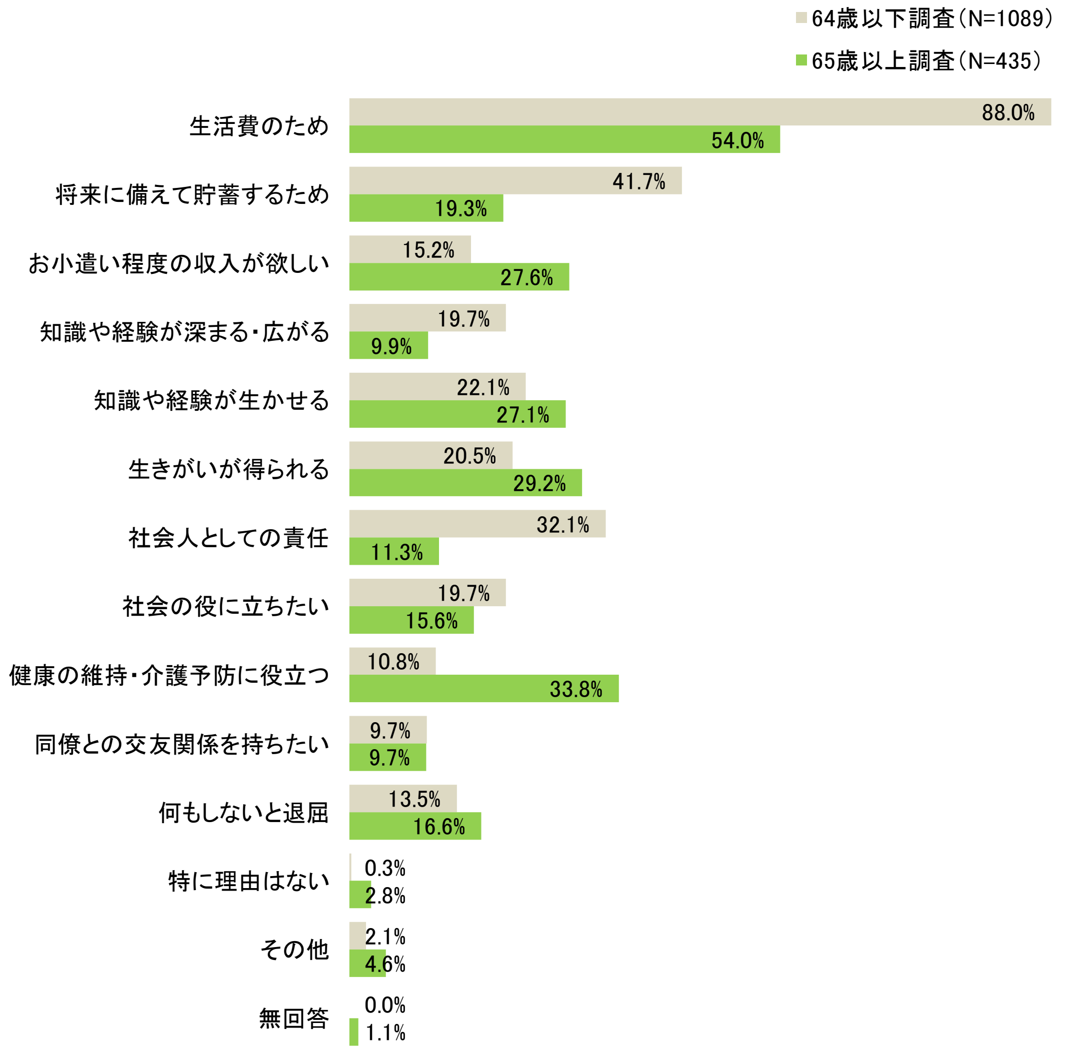
また、就労有無別に「問２－９　社会的な役割感」の回答をみると「仕事をしている」の方が「仕事をしていない」よりも、社会的な役割感について「日ごろから感じている」「たまに感じることがある」を合わせた割合が大きくなっている。

問２－９　社会的な役割感（就労の有無別）



問３－２－（４）　就労理由（複数選択）

「問３－１　就労有無」で「仕事をしている」と回答した者に対し、「就労理由」についてたずねたところ、64 歳以下では「生活費のため」「将来に備えて貯蓄するため」「社会人としての責任」、65 歳以上では「生活費のため」「健康の維持・介護予防に役立つ」「生きがいが得られる」の順に割合が大きくなっている。

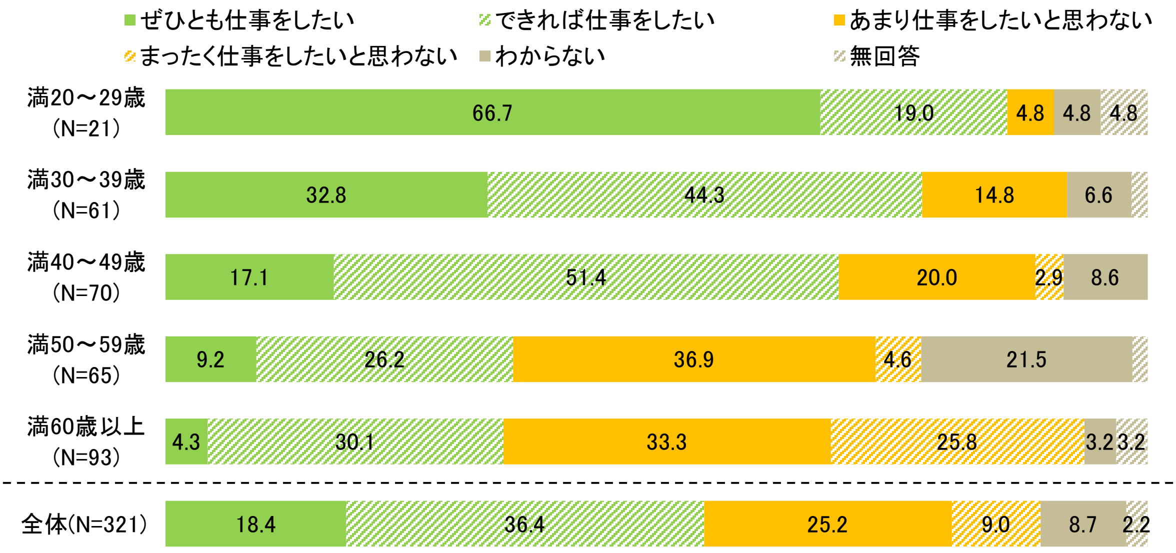


資料１

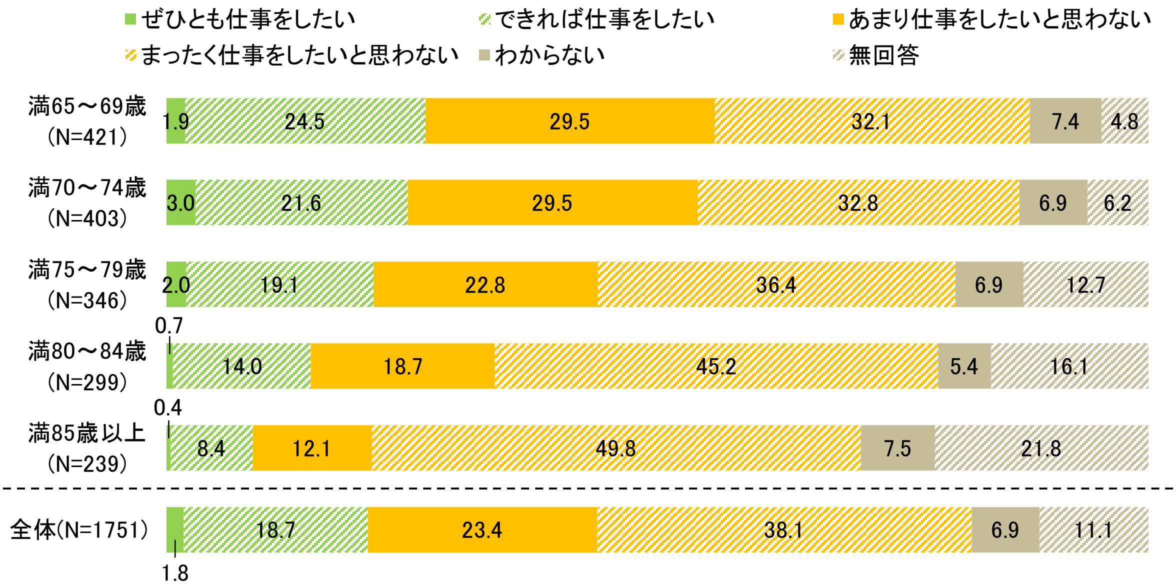
問３－３－（３）　今後の就労希望

「問３－１　就労有無」で「仕事をしていない」と回答した者に対し、「今後の就労希望」についてたずねたところ、年齢層が高くなるにつれ「ぜひとも仕事をしたい」「できれば仕事をしたい」の割合は小さくなっているが、65 歳以上の年齢層にあっても、なお一定割合の者が「ぜひとも仕事をしたい」「できれば仕事をしたい」と回答している。

【64 歳以下調査】



【65 歳以上調査】

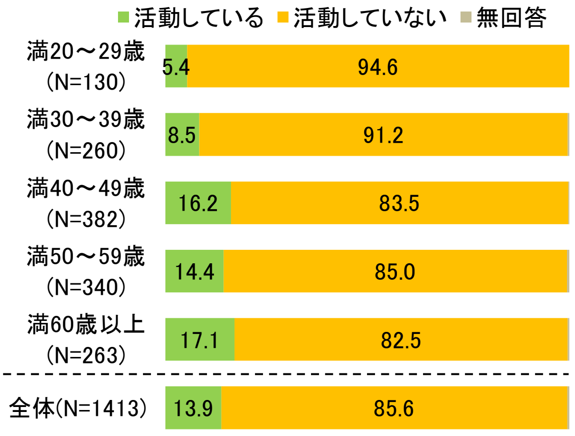


資料１

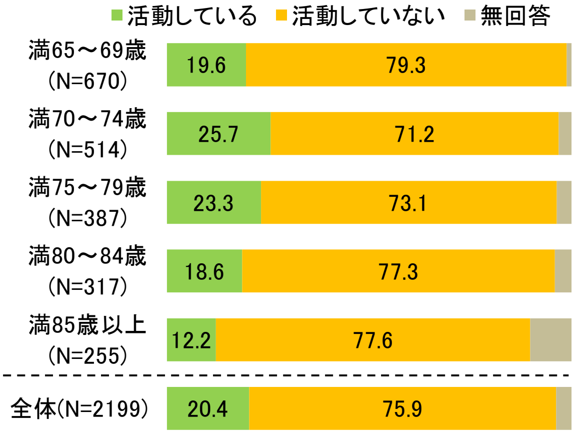
問４－１　活動有無

町内会・自治会などの地域活動やボランティア活動の有無についてたずねたところ、全ての年齢階層で「活動している」よりも「活動していない」が多く、「活動している」の割合が最も大きい「満 70～74 歳」の階層にあっても、その割合は 25.7%となっている。

【64 歳以下調査】

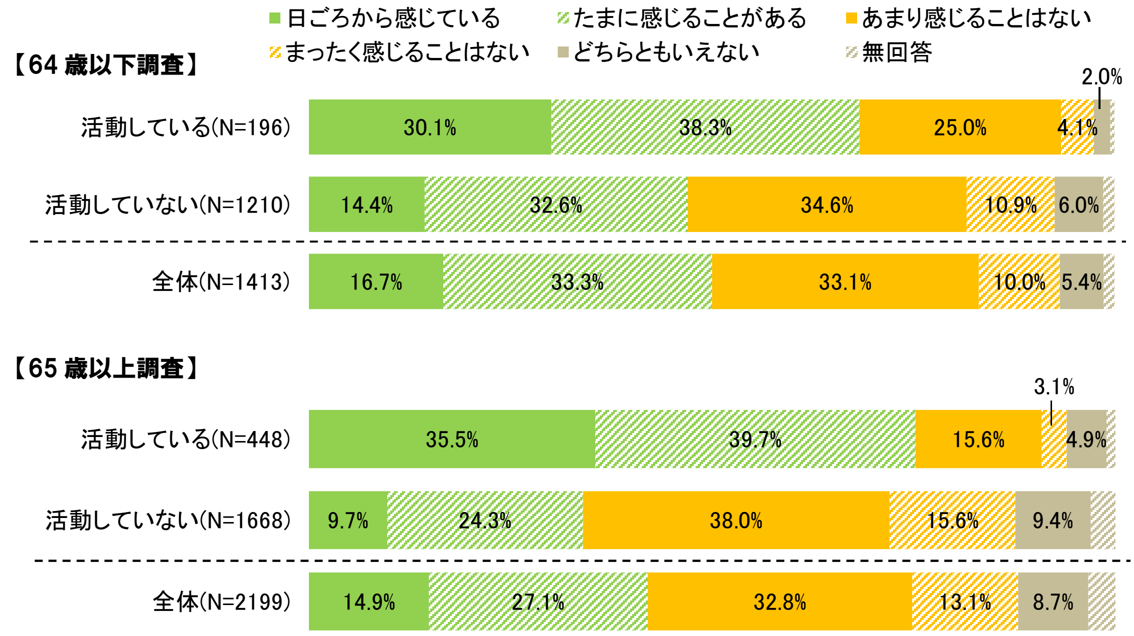


【65 歳以上調査】



また、活動有無別に「問２－９　社会的な役割感」の回答をみると「活動している」の方が「活動していない」よりも、社会的な役割感について「日ごろから感じている」「たまに感じることがある」を合わせた割合が大きくなっている。

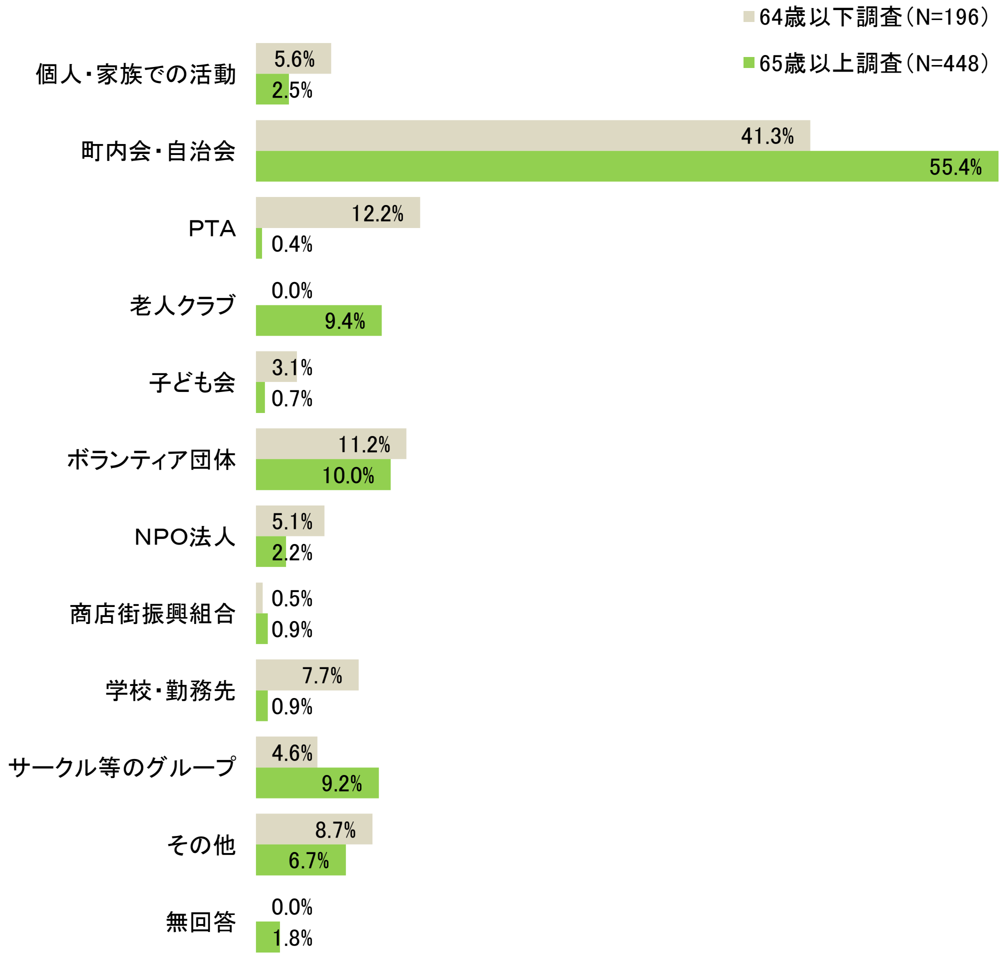
問２－９　社会的な役割感（活動有無別）



資料１

問４－２－（１）　活動形態

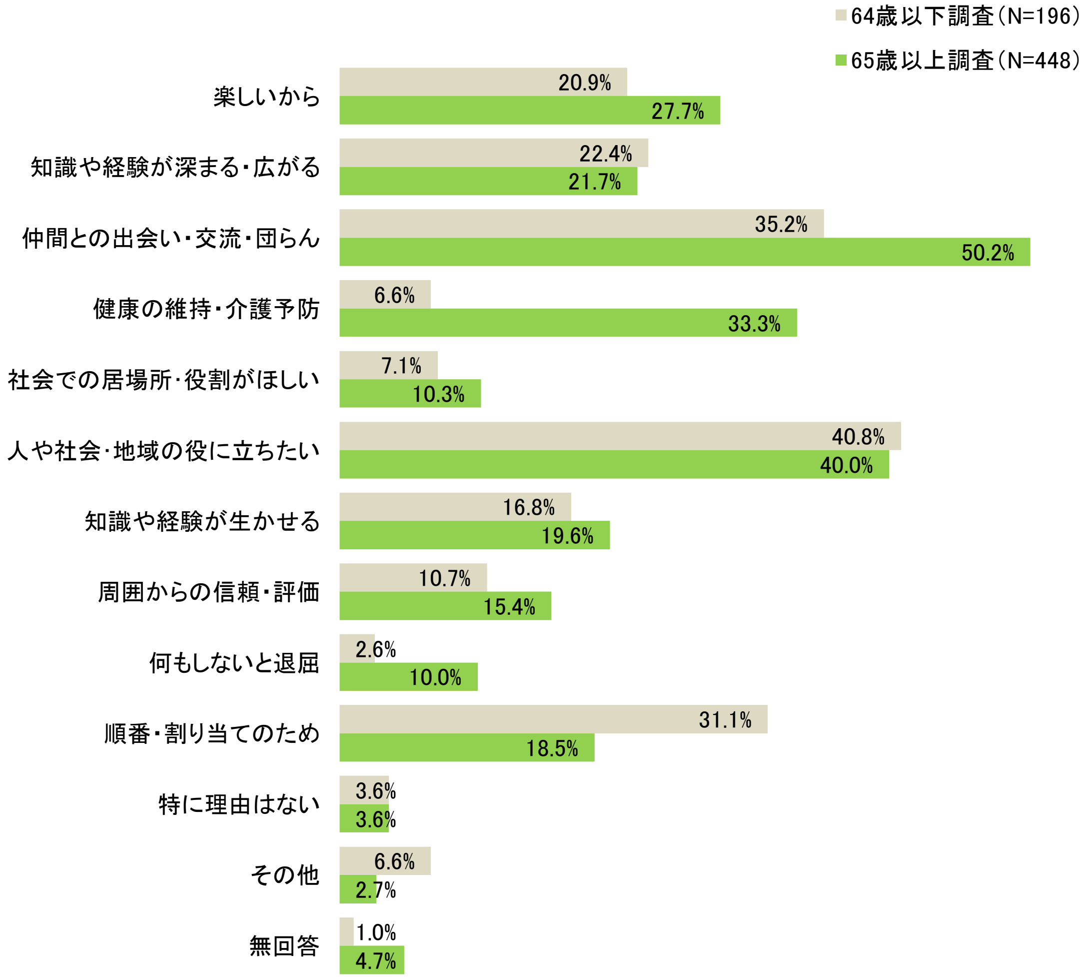
「問４－１　活動有無」で「活動している」と回答した者に対し、「活動形態」についてたずねたところ、64 歳以下では「町内会・自治会」「ＰＴＡ」「ボランティア団体」、65 歳以上では「町内会・自治会」「ボランティア団体」「老人クラブ」の順に割合が大きくなっている。



資料１

問４－２－（４）　活動理由（複数選択）

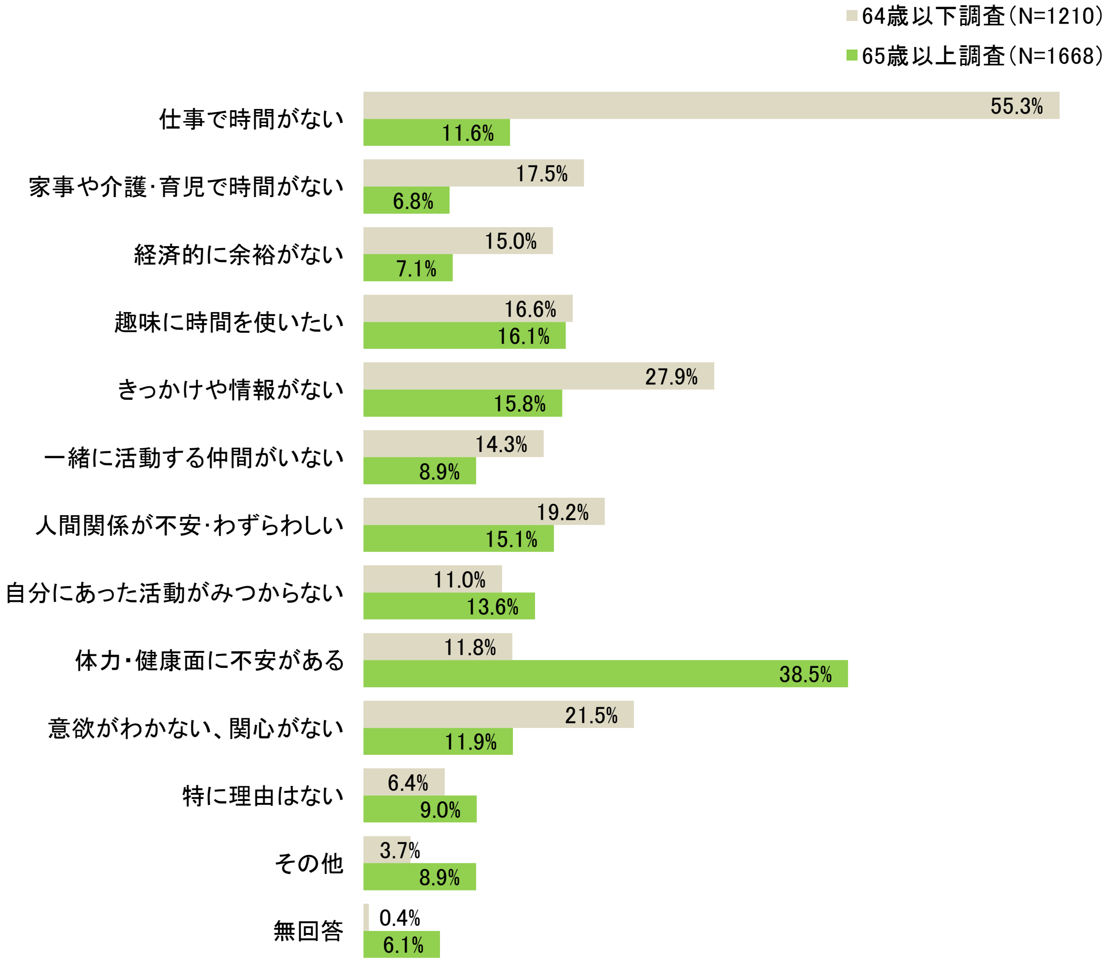
「問４－１　活動有無」で「活動している」と回答した者に対し、「活動理由」についてたずねたところ、64 歳以下では「人や社会・地域の役に立ちたい」「仲間との出会い・交流・団らん」「順番・割り当てのため」、65 歳以上では「仲間との出会い・交流・団らん」「人や社会・地域の役に立ちたい」「健康の維持・介護予防」の順に割合が大きくなっている。



資料１

問４－３－（１）　活動していない理由（複数選択）

「問４－１　活動有無」で「活動していない」と回答した者に対し、「活動していない理由」についてたずねたところ、64 歳以下では「仕事で時間がない」「きっかけや情報がない」「意欲がわかない、関心がない」、65 歳以上にあっては「体力・健康面に不安がある」「趣味に時間を使いたい」「きっかけや情報がない」の順に割合が大きくなっている。

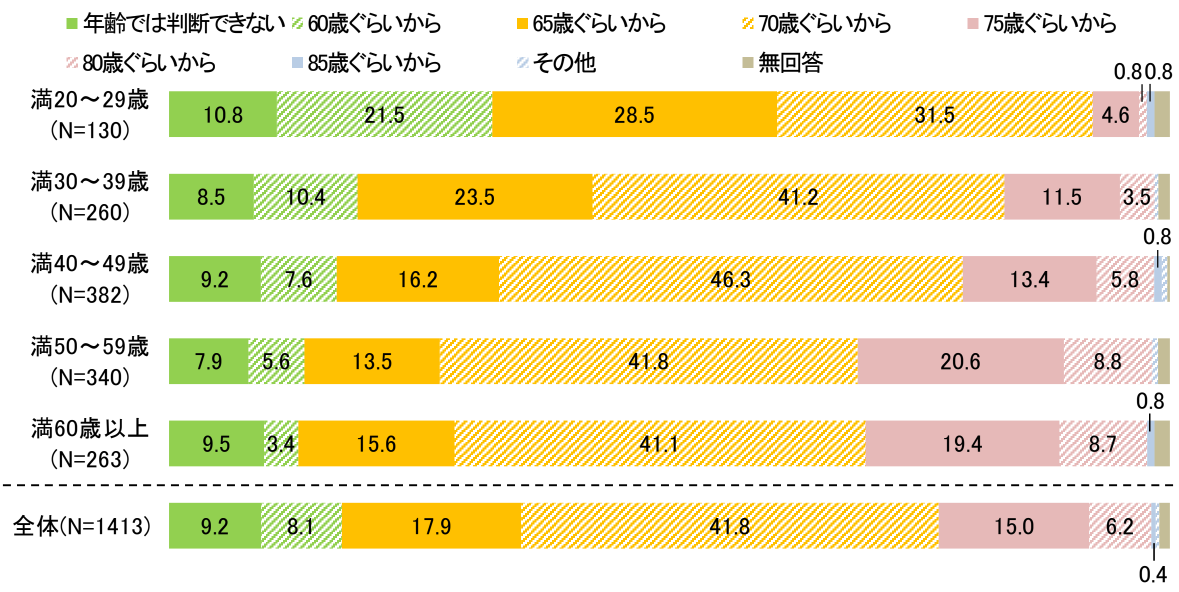


資料１

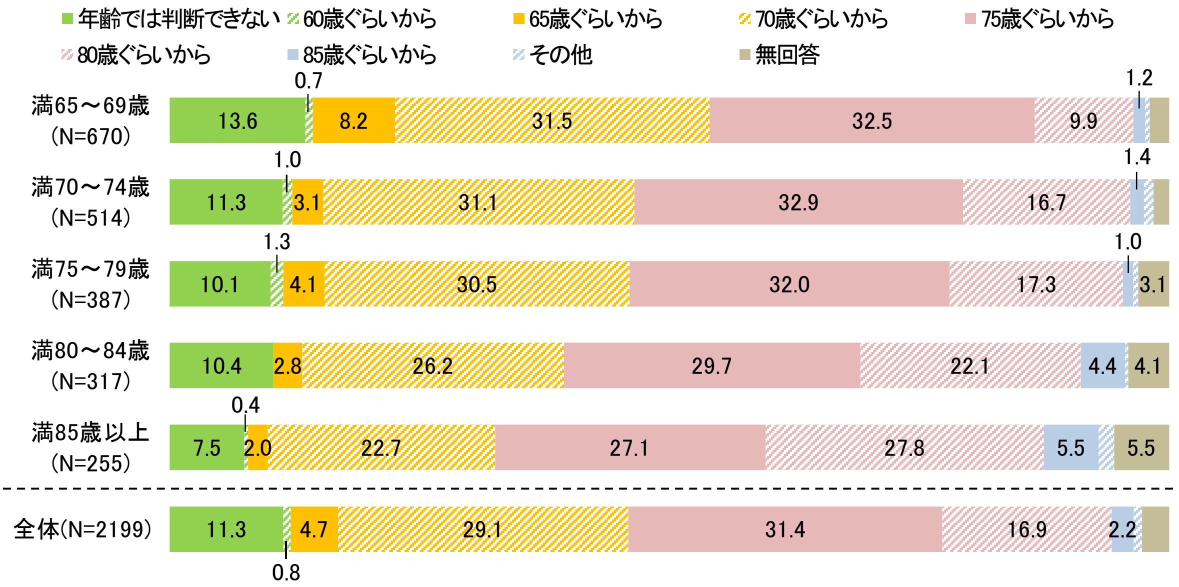
問５－１　高齢者は何歳からか

64 歳以下では「70 歳ぐらいから」の割合が最も大きく、65 歳以上では「満 85 歳以上」の階層を除き、「75 歳ぐらいから」の割合が最も大きい。回答者の年齢が高くなるにつれて、高齢者と考える年齢も高くなる傾向にある。

【64 歳以下調査】



【65 歳以上調査】

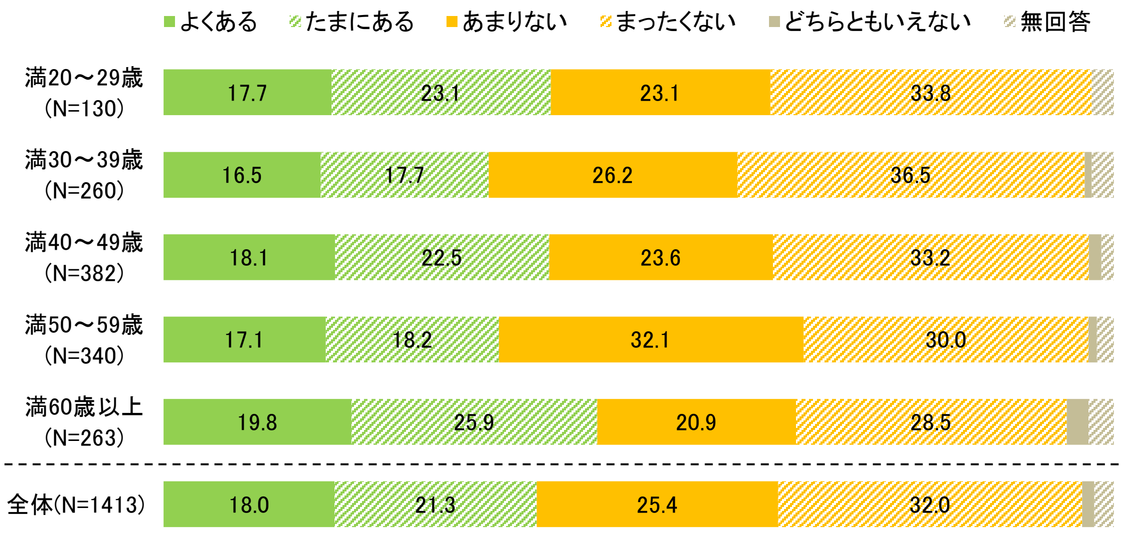


資料 1

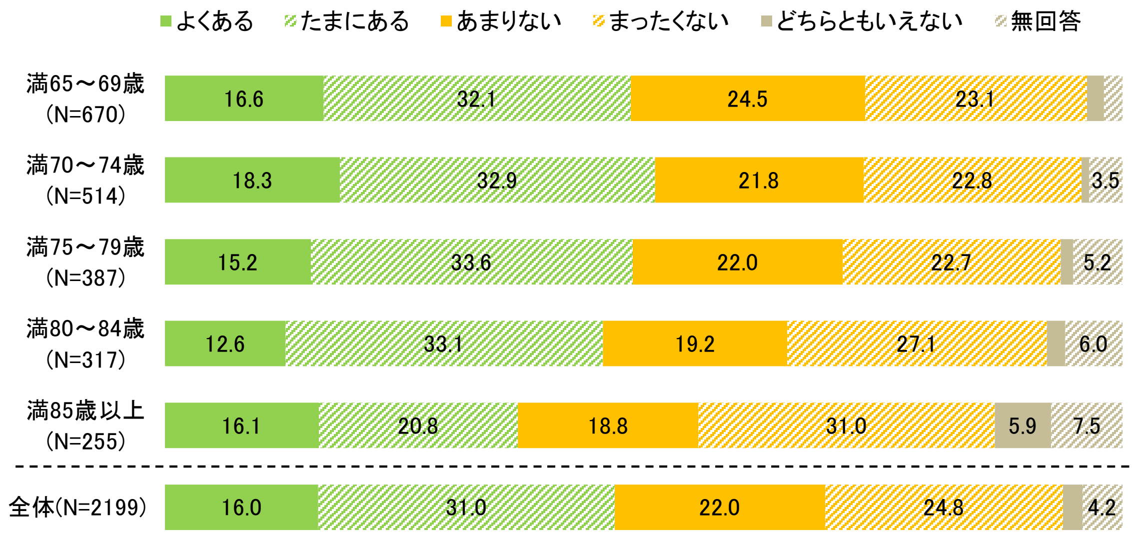
問５－２　高齢者・若い世代との交流

64 歳以下調査では「高齢者との交流」の有無を、65 歳以上調査では「若い世代との交流」の有無をたずねたところ、「満 65～69 歳」「満 70～74 歳」「満 75～79 歳」の階層では「よくある」「たまにある」を合わせた割合が、「あまりない」「まったくない」を合わせた割合を上回っているが、それ以外の階層では「あまりない」「まったくない」を合わせた割合が、「よくある」「たまにある」を合わせた割合を上回っている。

【64 歳以下調査（高齢者との交流）】



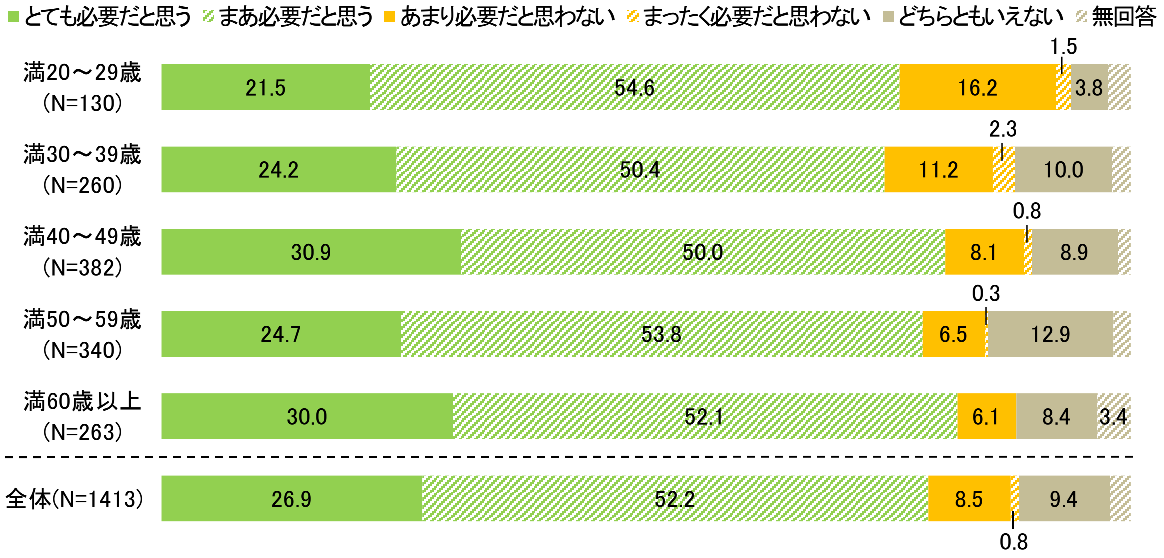
【65 歳以上調査（若い世代との交流）】



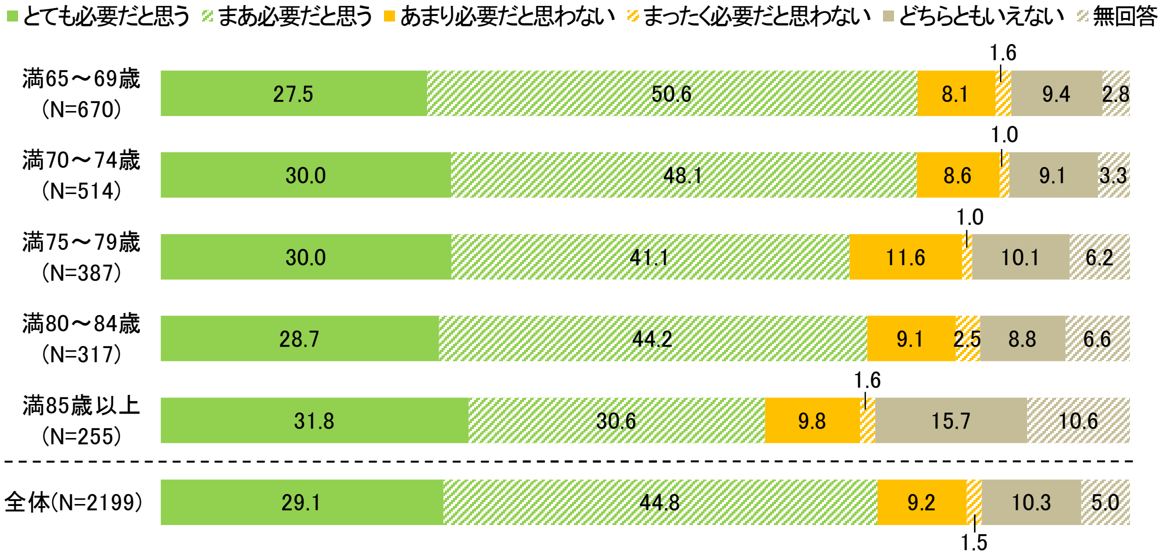
問５－３　多世代交流の必要性

全ての年齢階層で、「とても必要だと思う」「まあ必要だと思う」を合わせた割合が、「あまり必要だと思わない」「まったく必要だと思わない」を合わせた割合を上回っている。

【64 歳以下調査】



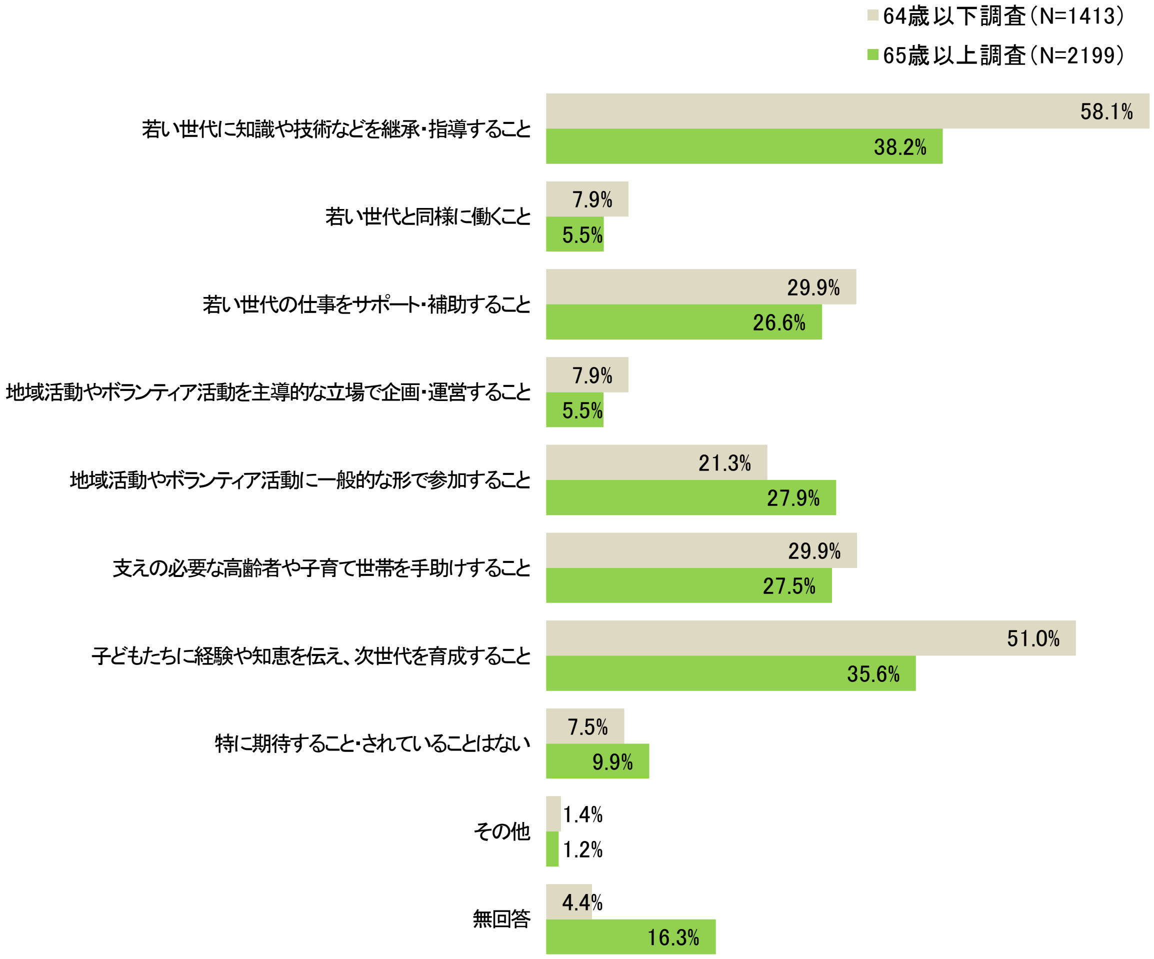
【65 歳以上調査】



資料 1

問５－６　高齢者に期待する・期待される役割（複数選択）

64 歳以下調査では「高齢者に期待する役割」を、65 歳以上調査では「高齢者に期待される役割」をたずねたところ、いずれも「若い世代に知識や技術などを継承・指導すること」「子どもたちに経験や知恵を伝え次世代を育成すること」の割合が大きくなっている。また、「特に期待すること・されていることはない」の割合は 10%以下となっている。

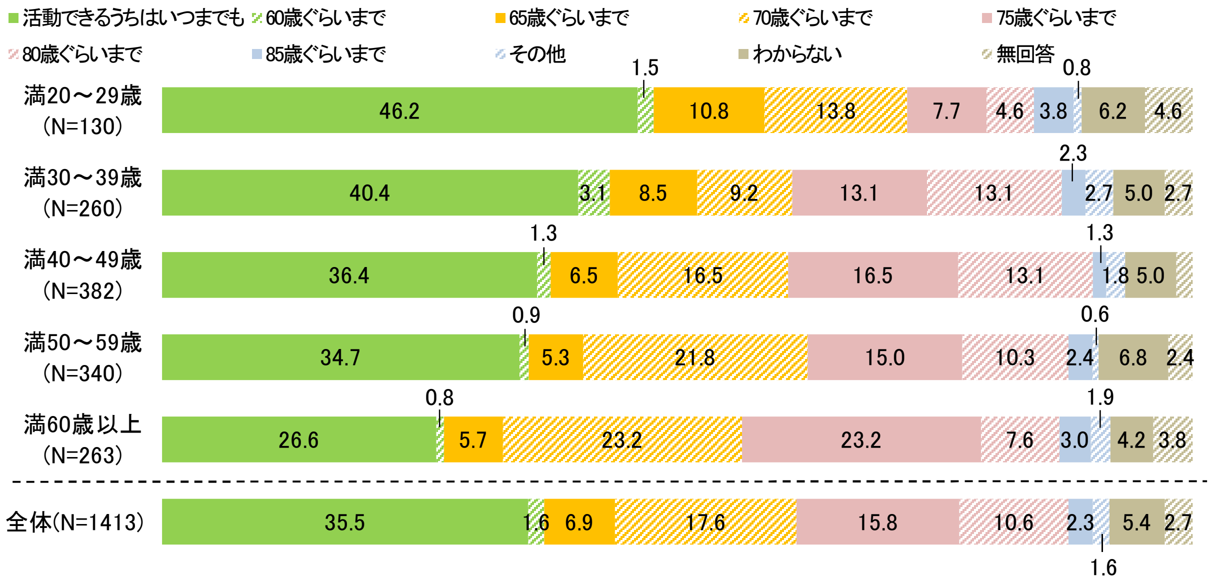


資料１

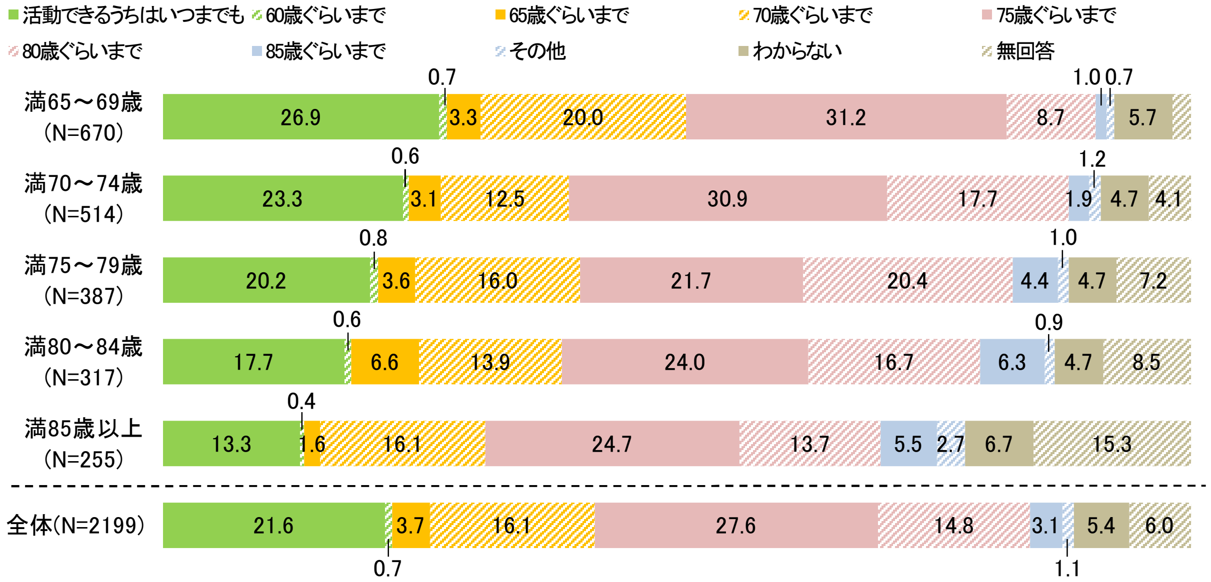
問５－７　何歳まで社会を支える側か

年齢別にみると、64 歳以下では「活動できるうちはいつまでも」の割合が最も大きく、65 歳以上では「75 歳ぐらいまで」の割合が最も大きくなっている。

【64 歳以下調査】



【65 歳以上調査】

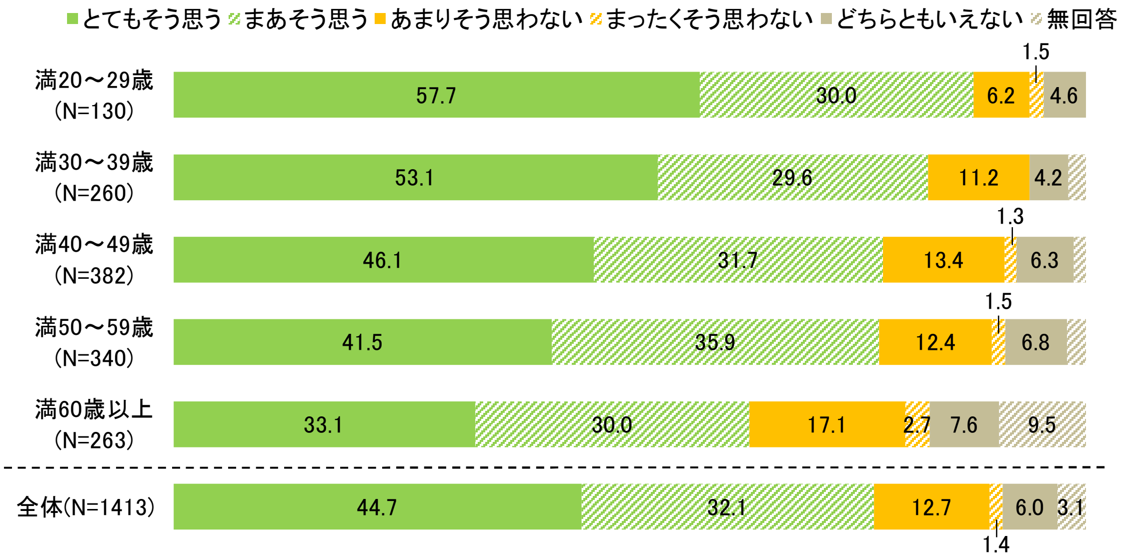


資料１

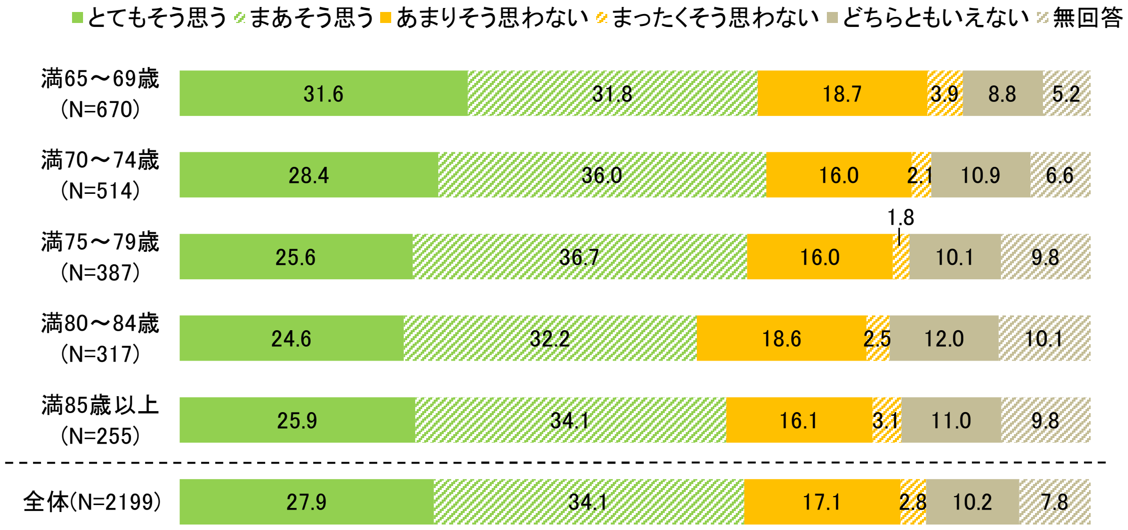
問６－１　世代の負担感

「今の社会では、若い世代に負担がかかっていると思うか」とたずねたところ、全ての年齢階層で、「とてもそう思う」「まあそう思う」を合わせた割合が、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」を合わせた割合を上回っている。

【64 歳以下調査】



【65 歳以上調査】

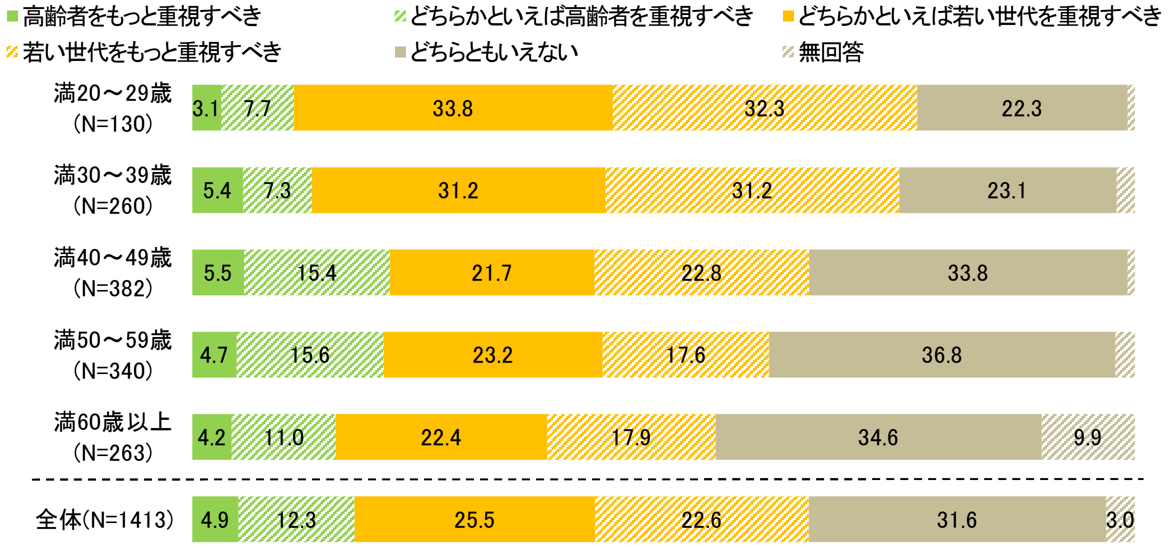


資料１

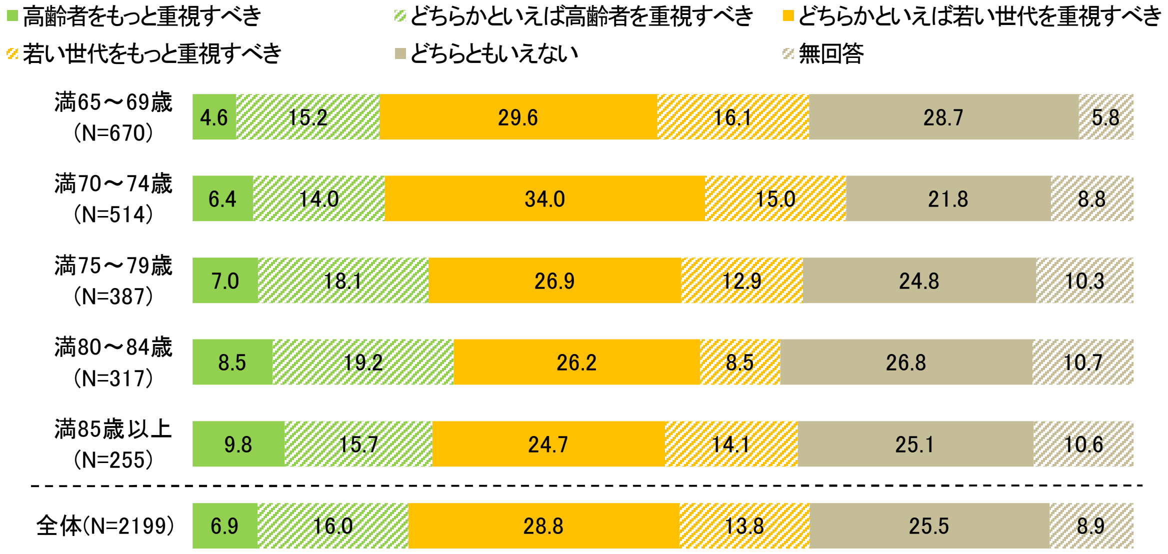
問６－２　高齢者と若い世代への支援・施策

「これからの少子高齢社会における高齢者や若い世代への支援や施策について、どのようにしていくべきか」とたずねたところ、全ての年齢階層で、「どちらかといえば若い世代を重視すべき」「若い世代をもっと重視すべき」を合わせた割合が、「高齢者をもっと重視すべき」「どちらかといえば高齢者を重視すべき」を合わせた割合を上回っている。その一方で、「どちらともいえない」も一定の割合を占めている。

【64 歳以下調査】



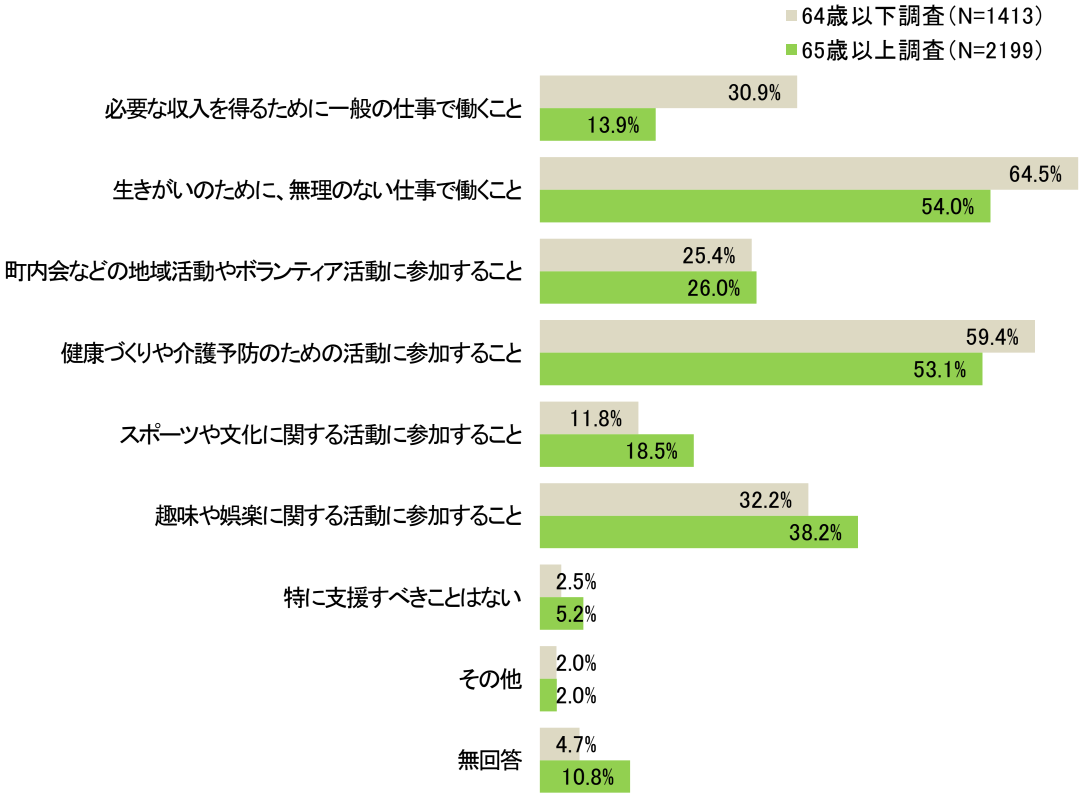
【65 歳以上調査】



資料 1

問６－３　重点的に支援すべき高齢者の社会参加（複数選択）

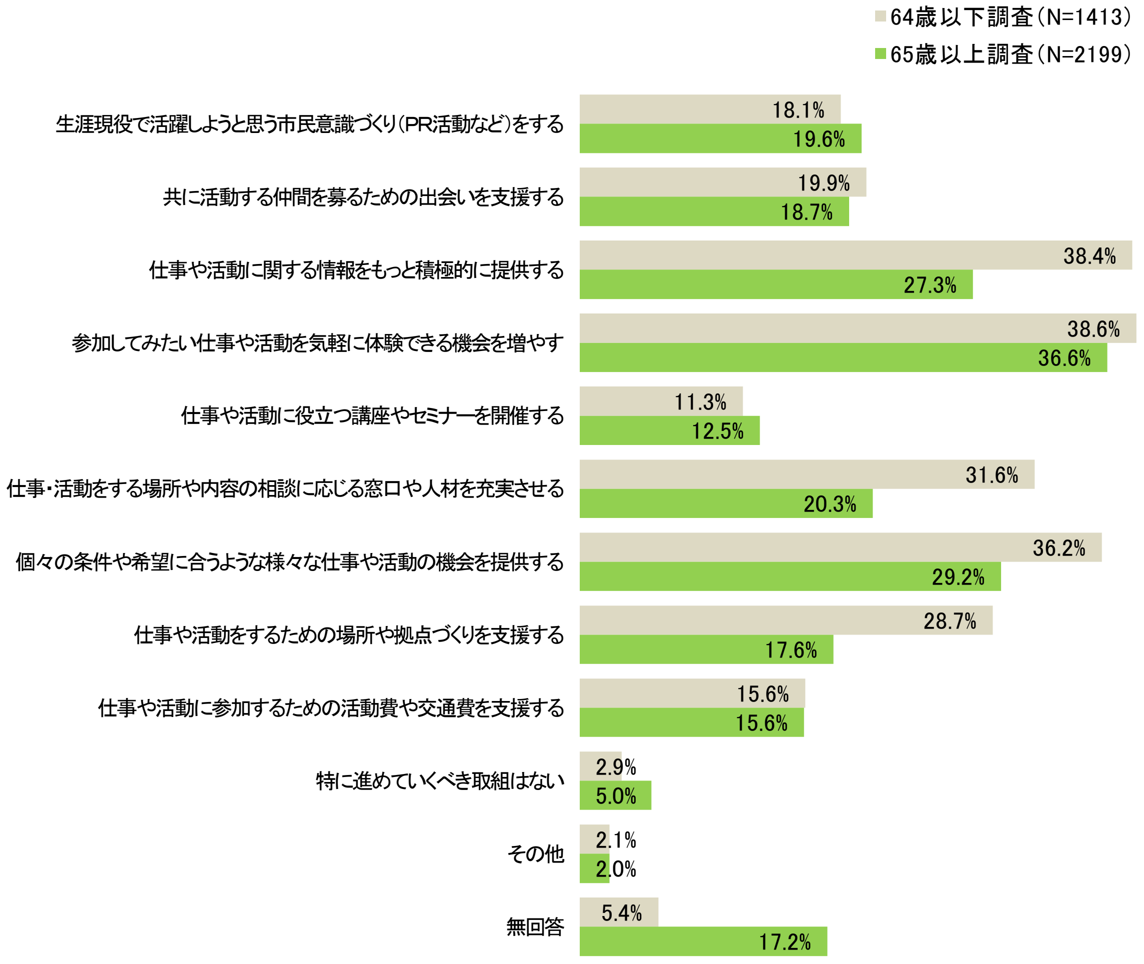
「高齢者のさまざまな社会参加のうち、札幌市が重点的に支援すべきことは何か」とたずねたところ、64 歳以下調査、65 歳以上調査のいずれにおいても「生きがいのために、無理のない仕事で働くこと」「健康づくりや介護予防のための活動に参加すること」の割合が大きくなっている。



資料 1

問６－４　高齢者の社会参加を推進するための取組（複数選択）

「高齢者の社会参加を推進するために、札幌市はどのような取組を進めていくべきか」とたずねたところ、64 歳以下調査、65 歳以上調査のいずれにおいても「参加してみたい仕事や活動を気軽に体験できる機会を増やす」「仕事や活動に関する情報をもっと積極的に提供する」「個々の条件や希望に合うような様々な仕事や活動の機会を提供する」「仕事・活動をする場所や内容の相談に応じる窓口や人材を充実させる」の割合が大きくなっている。



資料２

総体としての再構築（第４回会議振り返り）

第４回会議では、取組内容検討シートを用いて、取組内容及び既存事業の生かし方について意見交換を行いました。各委員からの意見を整理しました。

１　「つづける意識」をつくる

第４回会議でのご意見
■　年齢での線引きをしない
・エイジズムをなくそうという考え方は、つづける意識のちょうど裏返しでもある。年齢差別をなくそうという考え方の啓蒙の取組を入れて、年齢で線引きしないという部分を強く打ち出すとよいかもしれない。
■　各年代への啓発
・「退職後に地域に出ても何をしてよいかわからないので、企業にいるうちから CSR 等を通じて老後へ備えよう」と、「年齢にとらわれず活躍できるものがあるのだから、働いているうちから参加する」では、方向性が違う。
・「年齢を超えて現役」ということを扱いながら、訴えかける対象は「高齢者」と、線を引いている矛盾した取組だが、持っていき方で変わるのではないか。
・「つづける意識」の前提として、社会参加ということが身に付いていないと続けることはできない。社会参加の意識をどう身に付けさせるかを議論しないで、何かの仕組で人々が動き出して社会参加に繋がるというのは空論。
・活動を小さいときから一緒に行なうと、いつでも社会に参加するということにつながる。子どものうちから社会参加をどう身に付けさせるかにより、世代を問わず、高齢者も社会に参加するということがあたりまえになると思う。
・助け合いは大事なので、社会参加、社会貢献、世のため人のためになろうという意識を醸成していくという意味で、子どものうちからの教育は大事だと思う。
・教育や啓発も含めた事業を行う組織があってもいいと思う。
■　気運醸成
・札幌市が、高齢者の社会参加に対してしっかりとした考え方を持っているというメッセージを送ることが重要。例えば、WHO の「エイジフレンドリーシティ」（年齢差別を取り除き高齢者でも住みやすい社会にしていこうという社会運動・キャンペーン。社会参加も分野の一つ）に札幌市が参画するなど。
・ムーブメントとして、例えば WHO に参加するとか、平和都市宣言のように街としての宣言を出すのもよいかもしれない。

資料２

２　「つなげるしくみ」をつくる

第４回会議でのご意見
■ 共通基盤（プラットフォーム）の整備
・データベースはそれぞれの団体が利用するという意味で最低限ほしい。
・（仮称）シニアアクションアドバイザーというような社会参加を支援する専門的な人材を各拠点に用意できればより積極的になると思う。
■ マッチング
・もっと積極的に人材を発掘して利用し、いろいろな場面に売り込んでいく組織があればよいと思う。
・大きな民間企業等では、OB に社会との接点を作らせるということを行なっており、仕組をつくるより、いろいろなところで既に行なっていることを町内会等に取り入れていくことが必要だと思う。
・高齢者といってもいろいろな人がいて、対象によっても全然違うので、対象に合わせたやり方や訴え方、チャンスを与える仕組が必要だと思う。一戸建てが多い地域は町内会活動が盛んである一方、集合住宅が多い都心部では社会参加率は低い。一律に高齢者を捉えることはできないので、人によって企業で現役のまま活動する人もいれば、町内会で活動する人、趣味の世界で活動する人といろいろあるだろう。
■ 既存資源の有効活用
・福岡県の「70 歳現役応援センター」のような高齢者の社会参加を支援する総合的な窓口はとても大切だと思うが、一方で、市内には社会参加支援を行なう関係機関や団体、施設等があり、これを高齢者の社会参加を支援する拠点として有効に活用できるのではないかと思う。具体的には、市内で社会参加しえる機会等の情報をデーターベース化して集約し、既存の拠点同士で情報共有することで、拠点間の連携が可能になると思う。

資料２

３　「やりたいしごと」をつくる

第４回会議でのご意見
■　活動団体支援
・地域で取り組まれていることを、他の地域の人は知らない。他の地域の活動内容をひとまとめにして支援する組織を作り、地域を越えて参加できる活動があることを教えたり、こういう活動をしていると紹介するなど、他の地域がまねられる仕組を作るといいのではないかと思う。
・連合町内会の会議では単位町内会の活動や悩みごとを情報として流し、これについて他の町内会の対応方法等の情報共有を行なっている。関心をもってもらい参加してもらいたい情報は連合町内会を使えば短時間で共有できると思う。
・色々な団体や企業を横につなげて情報交換ができるような仕組をつくればいいのかもしれない。
■　高齢者雇用への支援
・柏市の生きがい就労のように社会参加を促進するような事業をつくってもいい。市が仕掛けて、どこかの企業や大学、病院などと組んで新しい事業を起こして、そこに高齢者を雇用するというやり方。例えば、病院ボランティアで、公共性のある事業だが収益も上げているカナダの事例がある。
・企業のリクルートセンターのように、積極的にリクルートしどんどん斡旋するスタンスの組織を作るといいのかもしれない。いろいろな企業から仕事をとってきて、高齢者を組織として、スタッフとして送り込むぐらい派手なものがあってもよい。

資料２

４ 既存事業の生かし方

第４回会議でのご意見
■ 介護サポートポイント
・介護に限定しないポイントにする工夫には意味があると思う。
■ 札幌シニア大学
・シニア大学というのは、教えっぱなしではなくて、活動につながっていく形であればいいと思う。
・卒業生の地域活動への参加促進策という課題認識があるのだから、そこをもっと工夫するということは可能だと思う。
■ はつらつシニアサポート
・年齢差別をなくすということを考えると、シニアサロンということではなくて、例えば子育てサロンと一体化するとか、子ども食堂とつなげてみるとか、そういうことで考えたほうがよい。
・シニアだけで楽しまないで拡張した方がいい。
■ 老人クラブ活動費補助
・老人クラブは、もっと枠を広げて、「老人クラブ」という名前も改めるとよい。老人クラブと呼ぶから、老人だと思う人しか来なくなってしまう。高齢者は増えているのに、会員が減っているというミスマッチが起きている。
・我々でも同じ年代で集まった方が話しやすいということもあり、老人クラブそのものが社会参加になっていることも事実である。
・三世代交流が進むような枠組を工夫するという時代になってきていると思う。同じ人たちで集まるというのは、いいとは思うが、子育て世代も入れて三世代交流をしたらいくらみたいな感じの補助金の枠組みを考えたらどうか。
・老人クラブという、そのくらいの年齢の方の集まるクラブは残した方がいい。老人クラブの中だけ楽しんでいることもあるが、例えば、公園・道路の清掃、花壇の整理、ゴミステーションの管理、中には小学校児童の通学路の交通安全をスクールガードや補導員と一緒にやることもある。「60 歳以上」という年齢の枠組みは、多少は変えてもいいと思うが、無制限にすると、せっかくある中身がバラバラになってしまうことがあるのかと思う。
・老人クラブに対して、各町内会や連合町内会が、予算に組み入れて補助してるところが多い。高齢者が増えているのに会員が減っているという現状があり、補助金は現状維持かさらに増やすようなかたちで維持した方がいい。

資料２

■ 敬老優待乗車証

・敬老優待乗車証は、49 億 1,470 万円という事業費の大きさが問題。どう考えても無理があるので、大幅に見直さなければならないけれど、方向性としては、老人福祉法の考え方から、敬老・生きがい・社会参加を支えるという、どちらかというとご褒美型に近いところがあるが、それを無くしてしまうというわけにもいかないので、従来の考え方を引き継ぐということがいい。制度的な見直し自体は是非していただければと思う。

・コーディネーターセンターのようなものを作るのであれば、この事業から少し予算をいただきたいところ。

■ 老人福祉センター

・老人福祉センターもこれからは発信していくという機能性を高めていく必要があるのではないかと思う。

■ おとしより憩の家

・公的なお金は、公に準じた組織に下りるべきだと考える。例えば、新しい公共ということで、NPO 法人等の組織があり、市がいろいろやるよりも、資源と個人を結びつけたり、仕事と組織をつなげるような仕組を作った方がいい。任意の団体を支援したり、人材を育成する中間支援組織を構築して、事業がおりて、しっかりと運営できる体制を整えることが重要だと思う。

・地元の人が惰性でつながっていくのではなく、ちゃんと中間支援組織を作っていろいろな事業を運営していくというスタイルがいいのではないか。

・施設として固定して作ってあるものは、設置した頃の人口構成や分布から現在は外れてきているはずなので、てこ入れしないでいると、関係者がどんどん減り、結果的に既得権益化しているようなことになってしまう。ちゃんと運営するような仕組を作っておかなくてはならない。

■ ねんりんピック

・ねんりんピックは、高齢だけれども生き生きと活躍できるというところを見せるというものであれば、まさに「つづける意識」につながっていくのであろうと思う。そういう意味で刺激にはなるのではないか。

・エイジズムの考え方で行けば、ねんりんピックは合わない部分もあるが、それは年齢差別という点でいえば二面性があり、それで仕方ないということになる。

資料２

■ 再構築の考え方について
・総体としての再構築は必要。今あることはそのままで、それ以上のいいことをと考えると、予算が増えるだけなので、見直しは必要だと思う。
・社会参加に近いものなのか、老人福祉に関わるものなのか、という線引きが必要。老人福祉の制度として矛盾があるものはもう一回議論をするべきだと思う。
・老人福祉と社会参加に分けるというが、どう分けるのか。例えば、老人福祉と社会参加の定義ではっきり分けることができるか。
・老人福祉と社会参加では理念が違う。その理念に基づいて施策が合致しているかという検証をしていかないといけない話。分けられるかとうことではなくて、分けないといけないと思う。多くの人がその理念を考え、交通整理できるところで札幌市が札幌市として分ければいい。それくらいの覚悟がないといい社会参加も在り方も検討できない。
・資源の配分というのは、選挙で選ばれた人がやるべきであって、委員会では意見を出すというのは可能だと思うが、他にお金をどうするかという議論よりもいいアイデアを出すことが目的であり、敬老パスについても効果があるのかという部分をしっかり把握する必要があると思う。

第１回～第４回会議の検討内容

資料３

検討・取組を進める上での観点

「世代間協調」の観点
高齢者の社会参加支援を考えるに際し、高齢者だけではない多世代の協調を図る必要がある。世代の相互理解があった上で、分かち合い、補い合い、支え合えるような世代間の協調関係を築く観点を持つ。

「多様性」の観点
高齢者の社会参加支援を考えるに際し、性別・年代・世帯構成・居住地域・健康状態などによる多くの差異に配慮する必要がある。個別的な条件やニーズなど、多様性に応じられる幅広い選択肢を確保する観点を持つ。

「公共性」の観点
高齢者の社会参加支援を考えるに際し、目的を明確にし、限られた財源を効果的かつ効率的に活用する必要がある。社会参加を、個人の幸福だけではなく公共の福祉にも資するものとする観点を持つ。

取組の方向性１「つづける意識」をつくる
誰もが生涯にわたって社会の一員でありつづけるという、社会全体の「意識」をつくる。

高齢者の意欲を高める取組
- **●関心や興味**
  - ・活動意義、具体的イメージ、知的好奇心
- **●やりがい、動機づけ**
  - ・誰かが喜ぶ、社会の役にたつ
  - ・帰属感や責任感
- **●生きがい、メリット**
  - ・楽しさ、仲間
  - ・健康増進や報酬

社会の共通認識をつくる取組
- **●年齢での線引きをしない**
  - ・「高齢者」の捉え直し
  - ・できる人ができることをする
  - ・高齢者に限定しない、エイジズムを払拭
- **●気運醸成**
  - ・札幌市としての姿勢を表明
    - ex:札幌市平和都市宣言（市民文化局）
  - ・ソーシャルアクション、ムーブメント
    - ex:さっぽろ市民子育て支援宣言（子ども未来局）
  - ・サクセスストーリー
- **●各年代への啓発**
  - ・子どものうちから、地域活動に親しませる
  - ・定年退職前の年代に対し、企業を通じて啓発
    - ex:シニア予備軍向け社会参加啓発ガイドブック（愛知県）

取組の方向性２「つなげるしくみ」をつくる
元気な高齢者と社会の役割を結び、意欲を活動につなげるための「しくみ」をつくる。

参加のきっかけをつくる取組
- **●情報発信**
  - ・活動内容の紹介、チラシ等でのPRなど
- **●学習や体験**
  - ・活動体験
  - ・スキルアップ（活動の可能性を広げる）
  - ・セミナー（学びで終わらせず実践につなぐ）

高齢者と活躍の場を結ぶ取組
- **●共通基盤（プラットフォーム）の整備**
  - ・分野横断的な窓口
  - ・ポイント制度
  - ・情報システム等
    - ex:福岡県70歳現役応援センター（福岡県）
- **●マッチング**
  - ・情報集約、人材バンク（シルバー人材センター等）
  - ・カウンセリング（よく話を聞く）
  - ・コーディネート（地域の困りごとと担い手を結ぶ）
- **●既存資源の有効活用**
  - ・関係機関の連携
    - ※関係機関：ボランティア活動センター、市民活動サポートセンター、老人福祉センター、シルバー人材センター、就業サポートセンター等
  - ・専門人材（アドバイザー）の配置

取組の方向性３「やりたいしごと」をつくる
元気な高齢者が、関心や条件に応じて自ら選び、役割を実感できる「しごと」をつくる。

活躍の場の魅力を高める取組
- **●役割づくり**
  - ・具体的な役割、経験を生かす
- **●活動しやすさ**
  - ・自宅から近い、短時間、少日数
- **●活動団体支援（活動活性化、運営支援）**
  - ・人材育成、好事例共有
  - ・活動費補助、収益確保、中間支援組織

活躍の場を広げる取組
- **●高齢者の活動立ち上げ等への支援**
  - ・立ち上げ経費補助、運営指導
- **●企業や団体との連携による機会創出**
  - ・協定締結や共同宣言により企業等の参画を促す
    - ex:家族のための地域同盟（ドイツ）
  - ・高齢者の活躍機会を創出する事業への支援
    - ex:病院での院内周辺業務の有償ボランティア
- **●高齢者雇用への支援**
  - ・インターンシップ、職場体験
  - ・求人開拓

再構築の基本的な考え方

① 今後の方向性に沿った活用
② 社会情勢の変化に適合
③ 効果的な既存事業は拡大
④ 負担のバランスを適正化
⑤ 財源を新事業に組替え

取組の方向性に沿った活用・強化

- **●介護サポートポイント**　意識　しくみ　しごと
  - ・効果があれば、大量に動員をかけられるようにする。
  - ・介護に限定しないポイントにする工夫には意味がある。
- **●札幌シニア大学**　意識　しくみ
  - ・教えっぱなしではなく、活動につなげる。
  - ・卒業生の地域活動への参加促進策は、もっと工夫する。
- **●はつらつシニアサポート**　しくみ　しごと
  - ・子育てサロンと一体化したり、子ども食堂とつなげる。
  - ・高齢者だけで楽しむのではなく、多世代交流の場として拡張する。
- **●ねんりんピック**　意識
  - ・他にも年代別の競技大会は増えており、事業の役割を整理する。
  - ・高齢の方が生き生きと活躍できるという意識づくりに生かす。

社会情勢の変化に応じた整理

- **●老人クラブ活動費補助**
  - ・三世代交流が進むような補助金の枠組を考えてみてはどうか。
  - ・高齢者が増えているのに、会員は減っているというミスマッチが起きている。
- **●敬老優待乗車証**
  - ・事業費の規模が他の事業と比べ大きく、バランスがとれていない。
  - ・金額の設定など考慮する必要はあるが、生きがいや社会参加には大事。
- **●おとしより憩の家**
  - ・施設活性化のため、しっかりと運営できる体制を整えることが重要。
- **●老人福祉センター**
  - ・参加促進を発信する施設へ、機能を高めていく。

資料４

検討報告書　構成（案）

検討報告にあたって ※序文	
Ⅰ　検討事項	１　検討事項
	２　検討の背景（現状）
	３　検討の必要性（課題）
	４　目指す将来像
Ⅱ　社会参加に関する市民意識	１　調査の概要
	２　調査結果
Ⅲ　検討・取組を進める上での観点 ※提言の前提	１　世代間協調の観点
	２　多様性の観点
	３　公共性の観点
Ⅳ　高齢者の社会参加支援の在り方 **（取組の方向性）** ※提言	１　「つづける意識」をつくる (1)　高齢者の意欲を高める取組 (2)　社会的な共通認識をつくる取組
	２　「つなげるしくみ」をつくる (1)　参加のきっかけをつくる取組 (2)　高齢者と活躍の場を結ぶ取組
	３　「やりたいしごと」をつくる (1)　活躍の場の魅力を高める取組 (2)　活躍の場を広げる取組
Ⅴ　再構築の基本的な考え方 ※附言	１　取組の方向性に沿った活用・強化
	２　社会情勢の変化に応じた整理
資料	委員会設置規則、委員名簿、検討経過、調査概要

資料５

検討報告書　骨子（案）

Ⅲ　検討・取組を進める上で踏まえるべき観点

１　世代間協調の観点

○　年齢で線引きをせず、多世代が共に活動できること
○　高齢者の集まりだけではなく、世代を超えて交流できること
○　ある世代が一方的に支えられるのではなく、支え合える関係を築くこと
○　年齢だけを理由に切り分けたり、優遇する年齢差別を解消すること

２　多様性の観点

○　多様さに応えるため、ニーズを的確に捉え、幅広い選択肢を確保すること
○　属性や生活環境などによる差異に配慮すること
○　これからの高齢者についても考慮に入れること

３　公共性の観点

○　取組の効果を当事者だけでなく、地域や他世代に波及させること
○　行政が公的に支援する必要のある対象・内容・程度等を整理すること
○　市民参加や受益者負担など、自助・互助・公助の均衡を図ること
○　公平性や必要性に照らして適切に財源を配分とすること

資料５

Ⅳ　高齢者の社会参加支援の在り方（取組の方向性）

１　「つづける意識」をつくる

(1) 高齢者の意欲を高める取組

○　活動意義や具体的イメージを伝え、関心・興味を喚起すること
○　やりがい、社会への帰属感・責任感などの動機づけをすること
○　生きがいやメリット（健康増進・報酬）を伝えること

(2) 社会的な共通認識をつくる取組

○　「生涯にわたる社会参加」を目指すことを全世代で共有すること
○　「エイジズム」（年齢に関する偏見や、年齢だけを理由に区別する取扱い）を払拭すること
○　気運醸成のため、札幌市としての姿勢を示すこと（例：札幌市平和都市宣言）、市民意識を育むこと（例：さっぽろ市民子育て支援宣言）
○　子どものうちからの活動参加、定年前世代への情報発信（例：愛知県「シニア予備軍向け社会参加啓発ガイドブック」）など、各年代に向けて啓発すること

資料５

２　「つなげるしくみ」をつくる

(1) 参加のきっかけをつくる取組

○　体験談や活動内容などの情報発信により、情報不足や不安感を解消すること
○　学習・体験機会を提供し、学びで終わらせず実践につなげること

(2) 高齢者と活躍の場を結ぶ取組

○　総合的な共通基盤（プラットフォーム）となる仕組を整備すること（分野横断的な相談窓口、事業間で互換性のあるポイント制度、関係機関が共有できる情報システム等）
○　高齢者と活動先をマッチングすること（募集情報のデータベース、人材バンク、カウンセリング、コーディネート、専門的な人材による個別支援）
○　既存資源を有効活用するため関係機関と連携すること（ボランティア活動センター、市民活動セポートセンター等）、関係機関に個別支援の専門人材を配置すること

３　「やりたいしごと」をつくる

(1) 活躍の場の魅力を高める取組

○　町内会の担い手づくりや、老人クラブの会員数増加につながる支援をすること
○　好事例集や勉強会などを通じ、運営の工夫について情報共有を図る（経験を生かせる具体的な役割づくりや、個別ニーズに応じた負担軽減、収益確保など）
○　活動団体への支援を行うこと（活動活性化、運営支援、人材育成、活動費補助、中間支援組織）

(2) 活躍の場を広げる取組

○　高齢者の活動立ち上げ等を支援すること（立ち上げ経費補助や運営指導）
○　企業や団体との連携により高齢者の活躍機会を創出すること（企業等との協定締結、共同宣言など）
○　高齢者の雇用促進につながる事業への支援を行なうこと（インターンシップの必要経費補助、高齢者が積極的に活躍できる求人を開拓）

資料５

Ⅴ　再構築の基本的な考え方

○　高齢者の社会参加支援の今後の「取組の方向性」に既存事業を位置づけ直し、新規事業と合わせた総体として再構築すること

○　新たな取組は、従来の取組の見直し（機能強化や時勢適応）と一体で進め、再構築の一環として事業費の組替えにより実施すること

１　取組の方向性に沿った活用・強化

○　従来の事業や施設を有効活用し、効果的な事業は強化すること

・介護サポートポイント：活動先の範囲を広げ、活動人数の拡大を図ること

・札幌シニア大学：卒業後の地域活動につながるよう運営改善すること

・はつらつシニアサポート：高齢者だけではなく様々な世代と交流しながら、地域への波及効果を生むよう運営改善すること

・ねんりんピック：「高齢の方が生き生きと活躍できる」という意識づくりに生かせる事業として役割を整理すること

○　類似する関連事業や関連機関との連携や統合も含め、既存資源を有効活用すること（ボランティア活動センター、市民活動サポートセンター、老人福祉センター、シルバー人材センター、就業サポートセンター等）

２　社会情勢の変化に応じた整理

○　人口構造や世代差等を考慮し、社会情勢の変化に応じた整理を行うこと

・老人クラブ活動費補助：会員数減少もあって活動が広がりにくい状況のため、加入促進や活動の多様化につながる補助金の枠組とすること

・敬老優待乗車証：他事業に比べて突出して高額な事業費が課題、「必要」「不公平」の両論あるが、他事業との均衡を考慮し、事業費縮減を図ること

・おとしより憩の家：利用する人や利用のされ方が限られがちな状況のため、運営体制向上により施設活性化を図ること

・老人福祉センター：参加を受け入れる現在の機能に加え、社会参加を促す発信の役割を担うよう、機能強化すること